

北スラウェシ日本人会  
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第33号



平成29年7月発行

## 目 次

01. バリ島料理	江田 直美	P. 02
02. 三陸で休暇中	大貫 周明	P. 05
03. 南洋真珠養殖 その5 (ビトン編)	今泉 宏	P. 06
04. マナドトゥア島滞在記 - 土地問題 (その2)	中村高太郎	P. 10
05. 北スラウェシと BC 級戦犯	長崎 節夫	P. 16
06. 編集後記		P. 30
07. 北スラウェシ日本人会会員名簿		P. 31

## バリ島料理

江田 直美

バリ島の料理で、有名なのが、Babi Guling(バビグリン 豚の丸焼き)や Ayam Betutu(アヤム ベトゥトゥ スパイシー蒸し鶏)です。

この料理をバリ島観光の楽しみの一つとして、訪れるローカル観光客を人気店で良く見かけます。

### Babi Guling

「Babi Guling Chandra」 場所—Jl.Teuku Umar,,,Denpasar

Babi Guling 専門店のようなのですが、nasi lawar ayam, ayam betutu もメニューにあり、個人的にはこちらが好みです。

### Ayam Betutu

「Ayam Betutu Khas Gilimanuk」 場所—Jalan Raya Tuban,,,Kuta

友人宅で頂いた、バビグリンがジューシーで、肉厚でとても食べ応えがありました。今まで食べたバビグリンの中で 1 番美味しかったように思います。マナドの Babi Putar の豚肉に近かったです。

今回、バリ島料理の中で、一番ご紹介したいお料理が Lawar(ラワール)です。ココナッツ風味が特徴の、野菜料理です。

Lawar は、バリ島ヒンズー教の祭礼儀式において、必ず作られる料理の一つだそうです。

また、日常的にも食されており、Babi Guling の添え物の一つとして、Nasi Campur(ナシチャンプル)のおかずの一つとしても、ショーケースに並んでいます。

## Nasi Campur

「Waroeng Dapoer Oma」 場所—Jl.Danau Buyan,,,Sanur



Nasi Lawar Ayam/ラワール左下



Babi Guling/ラワール中央上

Lawar と言っても、色々な種類がある様です。

以下、Wikipedia からの抜粋です。

☆☆☆☆☆ ラワールはバリ島の伝統料理の一つ。野菜、豚の耳、皮を細かく刻んで豚の挽き肉とココナッツフレークと一緒に各種の香辛料で和えた物。

香辛料は石臼ですりつぶした後に油で炒める。豚の生血を加える場合もある。豚の生血を加えた物はラワールメラ (lawar merah) といい、豚の生血なしのものはラワールプティ (lawar putih) という。ラワールはご飯のおかずとして食べる。バリ島の各地にあるワルンという庶民的な食堂でも食べられる。

豚を使ったラワールはラワールバビ (lawar babi)、鶏肉を使ったラワールはラワールアヤム (lawar ayam)、アヒル肉を使ったラワールはラワールクウィル (lawar kuwir) という。肉の代わりに茹でたジャックフルーツを使ったラワールはラワールナンカ (lawar nangka) という。サンドマメ、パラミツフルーツ、とキャッサバの葉などと一緒に調理する。

ラワールはバリの冠婚葬祭の主体料理でもある。 ☆☆☆☆☆

私が初めてこのラワールを食べたのが、バビグリンのワルンでした。

## Babi Guling

「Warung Babi Guling Sanur」 場所—Jl.By Pass Ngurah Rai,,,Sanur

ジューシーな豚肉に、パリパリの皮や、usus と呼ばれる内臓部分などと一緒に、細切れの豚肉と野菜が入ったラワールがセットになっていました。

ラワールのココナッツ風味と程良い辛さがふりかけのように、白飯との相性が抜群で、美味しかったのです。

それから、ラワール目当てに、ワルンのおかずを持ち帰り、よく買うようになりましたが、それでは飽き足らず、、、(相当、ハマってしまいました。)

日本の料理レシピサイトで有名な Cookpad のインドネシア語版から、レシピを検索して、家でもラワールを作るようになりました。

ご飯のお供に、時にはサラダ感覚で、食べられるのも良いです。家にある野菜を使って自分なりにアレンジしています。

家族からの評判も良いんですよ。(笑)

皆さまも、機会がありましたら、一度、Lawar をお試しください。

一見、地味な料理ですが、とても美味しいですよ！

Cookpad インドネシア語版も、どうぞ覗いて見てくださいね。

## 三陸で休暇中

Bitung 大貫 周明

皆さんこんにちは。

現在、私は第2の故郷である岩手県の三陸地区に滞在しております。

ちょっと早めのお盆休暇なのです。(お盆前後はマグロの仕事が忙しいので)

今年は例年になく大変涼しく、最高気温が 23℃程度。クーラーなしでも快適に過ごせております。

なぜ、ここが第2の故郷かと言うと、うちのカミさんが大船渡出身でして、自分も大学生時代を三陸町で過ごしておりましたので、何年かに一度、家族で帰省するのが常なのです。

この辺は平成 23 年に東日本大震災で津波による大きな被害を出しました。

私の母校で被害者が出て、学部も今は神奈川県に移転してしまい、思い出の校舎はほとんど取り壊されました。(研究施設として少し残っている程度)

カミさんの実家は無事でしたが、陸前高田の親類宅は津波で壊滅状態に。

今年ようやく家が完成し、仮設住宅から移動してきたばかりのタイミングです。

昨日は、陸前高田のお墓参りに行って来たのですが、山の斜面に沿ってお寺と墓地があるのですが、今年、行って見てびっくり。津波対策のかさ上げ工事で 10m 以上盛り土されておりました。いつもは墓地から町並みを見下ろせていたのですが、風景が一変し地面が同じような高さになっておりました。

まだまだ復興には時間がかかりそうです。なので僕は地元にお金を落とすべく、滞在中になるべくお金を使い、外食でいいもの食べて、明後日まで田舎でゆっくりする予定です。なので、この原稿も手抜きなので、すみません。

ちなみに、お盆中はモルジブへ出張して日本にマグロを送る仕事です。

では、ごきげんよう。

以上

## 南洋真珠養殖 その5 (ビトン編)

今泉 宏

2004年の季節はいつだったか、だいたいインドネシアは季節がはっきりしないから思い出も桜の季節だったのか寒い雪の季節だったのか重なり合わないから時期が曖昧になってしまう。バリでゴールドのよい真珠ができ始めて高い評価をもらい真珠養殖人生の絶頂期だった。反して私生活の方は日本に置き去りにした妻とすれ違いの日々が続き挙句に離婚してしまい、どん底をウロウロしていた。そんな時、今は他界された先代の現地社長から電話があり、ビトンの採苗がうまく出来なくなってしまい担当をしていた人が異動になるのでビトンの採苗を受け持ってくれないかと言われた。私は養殖場の管理は長年やってきたが採苗場は軽く研修を受けた程度で専門外であった。しかし、選択肢は他に無いようだったので渋々受け入れビトンへ移ることになった。

ビトンへ異動したらとにかく今までのやり方で何度かやってもらいながら自分も勉強をした。そしてことごとく幼生は死んでいった。シロチョウガイは受精して数時間後に孵化して泳ぎ出すが、タンクの表面が赤潮のように幼生で一杯になる。そして死ぬ時は前の晩元気に泳いでいたのが翌朝は泳いでいる個体は激減し水槽の底に赤く固まって沈んでいるのである。こうなったらもう手の施しようがなくどうせ死ぬので吸い出して廃棄するしかない。こんなことを何度も繰り返した。

と同時にあちらこちらから稚貝を分けてもらい10か月ぐらいしたら生存数の4割をその代金がわりに返還するという方法でなんとか凌いでいた。さらにバリでガッツリ儲けさせた合弁先のD社にも協力してもらい魔法の薬(後述)を分けてもらって自社でもいくらかの稚貝を生産することができた。余談になるがこの魔法の薬はD社がインドネシア人技術者のG氏に採苗を委託していた時そこのスタッフを買収してG氏の技術を盗んだもので、なんともインドネシアらしいというか気分の悪くなる話なのだが背に腹は代えられないのでお願いして分けてもらっていた。まあ、G氏にしても日本人の下で働いていたのを技術だけ盗んで独立していたのだから文句も言え

ないだろうが。これはもっと先の話だが挿核風景を観光客に見せるために核入れのやり方を教えてほしいと言うので教えてあげたらその後（私はすでにビトンに移った後）なんやかんや文句を言ってきて大げんかになり D 社との合併は打ち切りになった。前述の通り挿核技術は少し教えてあったので D 社は自力でできると思っただけで何年かやっていたらしいが結局閉鎖してしまっただけらしい。我々が 20 年以上やっても悟ることのできない境地なのだ。1 年や 2 年で悟られたらたまらない。採苗の方も魔法の薬の魔法が切れてしまったのか後年には稚貝もできなくなっていた。以前私があの薬は何なのか教えてくれないかと頼んだ時は鼻で笑った D 社の採苗担当者が、お宅の採苗は成功しているようですがどうしたら成功するのか教えて下さいと言ってきた。もうその手にはのらない。当然鼻で笑ってやった。結局技術だけ盗んで追い出してしまふというようなずるいことを繰り返してきた会社の末路はこんなものだろう。自分で苦労して得た技術ではないので問題が起こった時に対処ができないのである。

話はそれだが稚貝生産が軌道に乗るまでは他社から屈辱的な稚貝の受け入れをしながら、魔法の薬の使用をできるだけ抑えて自社でもなんとか稚貝生産を行い、その合間に情報を仕入れ、アイデアを絞り出し、試行錯誤を繰り返した。この時期は兎に角苦労をした。今までの人生で間違いなく一番苦労をした。2004 年に採苗を始め、この年は 9 回採苗を行い、翌 2005 年には 10 回、2006 年は 12 回、2007 年 9 回、2008 年 11 回、2009 年 8 回、2010 年にやっと安定生産ができるようになりこの年は 2 か月に 1 回、年 6 回やるだけで十分な量の稚貝ができるようになった。今になって記録を見直して初めて気が付いたが 2004 年から 2009 年までは採苗の回数と他社からの稚貝受け入れと魔法の薬でごまかしてきた 6 年間だったのだ。採苗は当時、受精から海へ出すまでに 40 日から 50 日かかっていた。それを 10 回やったら 365 日では収まらない計算だ。しかし幸運にもビトンの採苗場には大型水槽が 8 個もあったため次から次へと採苗を行うことができ、いろいろな方法を試すことができた。年 2 回しか採苗をやらないという会社もあるが私の 6 年間はそんな会社の 30 年分に相当する。

しかしながら 6 年間働き詰めだったのかと言うと全くそうではない。確かビトンに就任早々車を買った。これはビトンに長居をする覚悟の表れで、最初からこの仕事のストレスを予想していたのだ。車があったおかげで誰に気兼ねすることもなく仕事時



間外は自由に遊ばせてもらった。ただ、日本の本社の方からは個人での車の購入も運転も許可しない、ということになっていたと思う。これに関してはバリですでにバイクを購入し乗り回していて、上司からは会社は何かあっても責任を負わないと言われていたので問題は無い。日本国内で事故ったって自己責任なのだからインドネシアだからと言って会社に責任をなすりつけるつもりは毛頭ない。

考えてみたら2005年の9月に今の妻と結婚しているのでその1年ぐらい前には知り合っているはずで、となると2004年のまだ採苗を始めて間もない頃に彼女ができていたということになる。そしてまだ貝が死にまくっている2005年に結婚をして薬でごまかして生産をしている2006年には長女の春花が産まれている。どうやら働き詰めどころか好き放題やっていたようだ。

結婚後ビトンの街に借家を借りて住みだしたら妻の家族や親せき友人たちがひっきりなしに遊びに来て昼だろうと夜だろうとお構いなしに大騒ぎをするのには閉口した。それからアチャラが多過ぎる。大音響でキーボードに合わせて歌うので窓ガラスがビリビリと鳴るのだ。インドネシアの他の地域ではどうか分からないがビトン、マナド人は多分こんなものなのだと思う。

私も街へ引っ越したことで日本人会の方々とお会いする機会が増えた。特に近所だった先代会長の平野さんと長崎編集長のお宅には度々お邪魔をし、新鮮なお刺身や魚介類をたらふく食べさせていただいた。あの頃が私の人生で一番マグロの刺身を食べた時期だったのは疑いようもない。最近では生マグロを食する機会がめっきり減ってしまい寂しい限りである。こうなったら自力で釣るしかないとマグロを釣り上げられそうな竿を買おうかどうか迷っているところである。

2010年には採苗方法が確立されスタッフたちも全て苦勞を共にしてきたので日々の作業に関しては黙っていても自分たちでできるようになっていた。こうなると私はやる事がなくなり、ちょうど貝はできたが行先のない貝が余っておりそれらに挿核をし始めたのがこの前後だったと思う。何気なく始めた挿核だったが結果は思いの外よく今まで稚貝生産のみだったビトン支店でも真珠生産ができるようになり、いつしかビトンの主要な収入源となっていくた。

2011年あたりはノートを見ると今までびっしりと毎日記録が記されていたのが飛び飛びになり最後の方は受精日と沖出しの日だけとなり、いかに採苗が順調であ

ったか、いかに私が怠けていたかがよく分かる。思えば最初の6年間は苦しみに苦しみ抜いたのだからこれぐらいゆっくりさせてもらっても罰は当たらないと思う。

そして2012年、私が今いるタリセ島に移籍した年だ。バリの時もそうであったが苦勞してある程度形ができてしまうと、とたんに飽きてしまう。ビトンも最後の方は刺激に飢えていた。驚くほどよい真珠はできるが養殖海域が限られ量が揚がらないために業界で評判になることもない。やはりドカンと揚がり、あれは凄かったですねえ、と言われたいのだ。

そんな時タリセ島への移籍の話が持ち上がり、とんとん拍子に決まってしまった。タリセ島養殖場は以前からちょくちょく見学させてもらっていたので物凄いポテンシャルを持っていることはすでに知っていた。ここで真珠を作ってみたいと以前から思っていた。強く願えば夢はいつか叶うものなのですからなあ。

## マナドトゥア島滞在記 土地問題 (2)

中村 高太郎

皆様、こんにちは、中村です。

最近 (2017/07) のマナドトゥア島近況ですが、、、

マナドトゥア島では、多くの住民が、電力会社 (PLN) へ電気料金の不払いで問題になっています。ついに PLN のマナド支社も怒ったのか、島内の全戸をプリペイド式メータに変えるという事になったようです。マナドトゥア島の PLN は、マナドトゥア島民が勤めていて、電力供給や発電機のメンテナンス、メータの点検・料金の徴収などを行っていますが、島民という狭いコミュニティで親類関係も強いため、例えば、何ヶ月も不払いの家の電気を止めるといった強硬に出ようものなら、そのスタッフは、村八分にされかねません。そんなわけで、不払いがズルズルと続いていて、とうとうマナド支社の堪忍袋の緒が切れたのでしょう。

プリペイド式メータは、デジタル電気メータ本体に数字のキーパッドがついたシンプルなものです。そして、利用者は、事前に電気の度数 (OOKWH という形で) を購入することになります。これはコンビニ (インドマートやアルファマートなど) やプルサと呼ばれる携帯電話の度数を売っている露店であるとか、あるいは、私の方 (笑) からも購入することができます。

お金を払うと、それに準じた度数をメータにセットするための 20 桁の数字の番号が発行されます。後は、この番号をメータに打ち込むわけです。

プルサ式のメータは、PLN のスタッフの検針巡回する必要がなく (ただし定期的に違法改造がされていないかのチェックで巡回する必要があるだろう)、また前払い制なので、払わなければ、理由に関係なくメータが機械的に無慈悲に電気をカットするため、PLN にとってはかなりのメリットだと思います。

そのようなわけでマナドトゥア島ではメータの取り換えが行われており、7月の下旬、マナドトゥア島の実家へ監督のために行ってきました。

色々なダメ出しをしてしまいましたが、PLN のスタッフからは、それが正しいのであるが貴方みたいなのが 2~3 人いたら、1 週間他の仕事ができない・・・などと言われてしまいました。以前のメータからの屋内引き込み配線は、恐ろしく細い（小学校の豆電球を光らせるときに使うような細い電線・・・）ものでびっくりしました、ここは、単心 2.5mm<sup>2</sup>の太いケーブルにしました。・・・屋内ブレーカも、いくつかのルートに分け複数配置しました、今後は、徐々にまともな配線にしていく予定です。

※さらに、将来的に全島民がプリペイドメータに変わり不払いや正常になった時に、電力の 24 時間化を行うという話もあります。しかし、島民たち（特に奥さん連中）が昼間、TV 鑑賞にふけて、仕事しなくなるのでは、という懸念と反対の声もあるようです。

さてさて、前回は、X がパラ（町内会長のような役職）のところに夜押しかけて、「妻が土地の権利書を盗んだ」と事実無根の通報をし、翌日、パラが家にやってきて、パラの家で事情聴取を明日（2016/4/4）行う、という所でした。

翌日の 4/4 の朝は、とにかく異常な X の態度に、こちらも不測の事態（暴れるとか、こちらの書類などを毀損したり等々）を考慮してビデオカメラにボイスレコーダと準備をしました。バッテリーも夜間に充電等は済ませて準備万端です。さてマナドトウア島は、以前にも会報に書いてありますが、電力が夜間しかありません。こういった準備はきちんと計画的に行っていないと当日朝に充電するといった事は出来ません。（厳密には発電機も持ち込んでいますので可能ではありますが・・・）

パラには、X は、高圧的な態度で妻が書類を盗んだと主張します。こちら側は書類の作成の際の証人なども呼んでいます。一方で X は一人のみです。

X は常にその土地は私のものだと言うばかり、そして、こちらの書類のコピーが出てきますが、書類の存在は知らなかったのか、動揺が見られます。足ががくがく震えているのか、しきりに、ビンボウゆすりを始めました。しかし、X は開き直ったように、「この土地は、自分が購入資金を半分出した」と言います。パラは購入資金はどのようにして得たのだ？なぜ半分も出しているのに書類にはあなたの名前がないの

だ？領収証などはあるのか？と問いただしますが、何も持っていないようです。

購入資金についても、家畜を売ったものだとか抽象的に回答、更に、遠くの親類を列挙してみんな知っていると言い出します。更にXは、この書類は日本で偽造されたものだなどと言い出します。コピーでは納得できない原本を見せろと言います。

更には、裁判だ裁判だ（pengadilan ! pengadilan !）と叫びます。

パラは、原本を提示して疑いを晴らすのが良いと言います。論理的な説明が通日相手ではないようですが、しかし、ほかに方法はないようです。日本から取り寄せることとしました。（もっともな話であります、インドネシアでは、X周辺とパラがグルになっている可能性も否定できません。原本がマナドトウアに来たとたん強盗が入るとか、原本を提示したところXがいきなり燃やしたり、ぐちゃぐちゃに毀損したりしたら、大変です。とにかく既に常識は通用しませんから、十分な用心が必要です。）

考えてみれば、相手は、窃盗で訴え出たのです。書類や土地の権利がどうであるかなどについては、また別問題です。少なくとも書類は、遺言の証言としては妻にあてたもので、土地を妻に譲る旨の記載があり、そもそも、それは盗むものではないので明白です。明らかに、書類を盗んだという嘘の口実で、土地問題を作り出し、その権利は自分にあると言わんばかりです。

（本来であれば、窃盗なら警察に行くべきものですが・・・この辺からオカシイ）

しかし、どうにも怒り？が収まらないようなXです。これは、こぶしを振り上げたものの、収まりどころが・・・というより、次はどんな手かという感じで懲りてない。

事実、この後、Z（符号は前号を参照ください）はパラの方に意気揚々と出向き、書類の弱点はないかとか、色々な申し入れを行ったようですが、パラは、Zに「書類はどこにもおかしいところはない。それでも納得できないなら、証人を一人一人当たって確かめてみることだ。」といったことを言ったようで、残念そうに帰っていくZの姿が目撃されています。更には、他のエリアのパラにも助言を求めていたようです。

さてなぜZが出てくるのか、おそらく裏にはYやZのファミリーも絡んでいるの

でしょう。聞くところ、このXは小学校も出ておらず、字の読み書きができないのだとか。・・・それで、裁判だ！裁判だ！と騒ぐのは、もはや周りから、入れ知恵されていることは明白です。「このように訴え出たらよい」とか、そういったところでしょう。通常であれば、盗みは警察に訴えるべきですが、警察も証拠もないし相手にしないというのは織り込み済みで、更には、盗みを訴えるのが目的ではなく、土地が狙いなのは明白です。もちろん最初から土地問題であれば、パラヤルラなど行政関係者に訴えるのは、間違いではありません。

普通にこの土地の権利は本来、私にあると思うから何とかならないかと行政に訴え出れば、良いものですが、変に書類を盗んだなどというから、彼は、最終的には大変な状況に置かれる事になります。

実際に、書類の内容や証人の証言から、盗みである可能性はない（土地関連書類にXの名前がないことや、遺言には妻の名前があることなどで、妻が盗む意味がない）ことがわかるわけですが、それ（嘘の通報）を謝罪するでもなく、途中から、いつの間にか、盗みの問題ではなく、土地の所有者の問題にすり替えているわけです。

妻や妻の周りは、今は感情的になっているだけだろう、そのうち収まる、、、、などと言いますが、もちろんXは感情的な部分はあるでしょうが、Zなども裏で粛々と活動している所から、それだけでは、なさそうです。これが厄介です。覇気だけでいえば、既に、妻のほうは負けてしまっています。本当に守れるのか・・・と不安になります。

妻経由で、妻の友達の法律の専門家に相談しました。この専門家は、女性で、現在サムラトランギ大学で法律関係の講義を行っており、弁護士資格も持っており、さらには、法務コンサルタントなどもやっている方です。妻が2003年前後ジャカルタでお手伝いさんの仕事をしていた時のボスの家族だったとか・・・どうも、一家で、法律家のようなようです。・・・あれ、?!、Xは2002年に書類が盗まれたとか通報しているが、ちょうどそのころ、ジャカルタにいつている頃では・・・リモート窃盗（ドローンを使って遠隔で盗むとか？）でしょうか?! まあ、先ほども書いたように、問題提起のための口実に過ぎないのです。と言っても無実の人間に罪を着せるなど許せ

ません。

さて話を戻し、専門家のご意見では、「こちらには、書類や証人があり、向こうには何もないので心配はいらない。また、現状こちらが土地を実効支配しているわけで、それが侵害されてない以上、こちらから訴えを起こす事は出来ない。」というものでした。至極当たり前、日本でもそうだと思います。つまり、勝手に入ってきて家を壊すとか何かすれば、即警察に通報といったことができるが、そうでない以上、こちらからは、できないというものでした。(国際問題でいえば、竹島と尖閣諸島のようなものです。竹島は、韓国が不当占拠しており、日本が国際舞台に提訴することもできるが、尖閣諸島は、中国が、まだ手を付けてない口だけだから、提訴できない。)

では、嘘の通報に対してはどうかという質問をしましたが、なんと「インドネシアには、虚偽の通報そのものは、罰則はないのだとか・・・」、(嘘の通報に振り回され、業務妨害とかは、あるのですが、それはパラヤルラが訴えるべきものですから、こちらもどうしようもできません。パラヤルラも世間体がありますから、この程度では、訴えたりしないでしようという所です。)

しかし、これでは、事あるごと(土地関連の書類にある、証人の誰かが亡くなったとか、家族が病気で忙しいときなど隙をついて)に何か訴え出てきたら、いちいち対応するのは、たまったものではありません。更に他の人もこの一件を見て、ノーリスクという事で、「とりあえず『ダメモト』で訴えてみるか・・・」などと続くと、大変です。何かしら訴える側もリスクがあることを認識してもらわないといけません。

そこで、見方を変えて、「名誉棄損」で訴えられないかと相談してみました。

実際、マナドトゥアの小さな村ですから、噂話たちまち広まり、近所の人からは、「Xの奥さんのYの連れ子のZには、警察に知り合いがいる。怖くないのか?」とか「土地は昔、HerydがXにRp600juta(=500万円程度、マナドトゥアの土地の相場からして100%あり得ない額)のお金を払うという話だったみたいだが?払っていないのか?(払わない方が悪いだろう)」などと変な話がいつぱい出てきています。

さて専門家の回答は、「名誉棄損?!・・・そういう問題では聞いたことないけど、

理論的には、訴えることはできるけど、、、しかし、そんなことしても、裁判費用とかすごくかかって、勝っても、慰謝料とかは、相手の支払い能力無いだろうから、取りようがないし、お金を捨てるだけではないか・・・」というものでした。

土地問題で、ごたごたがあるのは気分が悪いことですが、日本の場合は、通常であれば、相手も何らかの根拠があるから、お互いの書類や裁判等で、はっきりさせるといのは理解できます。しかし、Xの場合（Xの周辺家族も含む）は、根拠もないのに横取りするべく、土地問題を作り出し、行政等に審議をさせようとする目的で、書類の窃盗という冤罪を作り出し嘘の通報をするというの一線を越えていると言えるでしょう。

さて、それでも、まだ収まらないXのようですが、今度はルラの方に上訴したようです。きっと、ルラにしてみれば、バカバカしいことであり、そのようなことはパラの段階で治めてくれという所ではないかと思えます。

その後はいったん終息したように見えました。しかし、私の方としては、Xが訴えを取り下げたのか、単に、今は分が悪いから、何か機会をうかがっているのか分かりません。妻は、もうこの件は終わった。その証拠に今は色々言ってこない、、、など言いますが、Xと同じで根拠がありません。ですから、本当に終わったと言うならXは訴えを取り下げたのか、あるいは、まだであるなら、Xは、訴えを取り下げるといふ事をパラやルラに聞いて、しっかり確認を取るようにと言いました。

案の定、Xは取り下げてはいない、ルラが仕事をしていないから進んでないだけだ！とパラに言ったそうで、やる気満々のようです。困ったものです。

Xの「ルラは、仕事をしてない」という事に呼応してか？・・・ルラも、じゃ裁定してあげるから、4/22にマナドトゥア島のパンガリンガンにあるルラの事務所まで来なさいとなりました。さてさて、どうなるのでしょうか。

次回へ続く、、、

ちなみにパラやルラの位置づけは、次のような感じです。ルラは日本で言う町内会長と区長の間になります。なお、ルラは公務員ですが、パラは住民から選出されます。市長（ワリコタ）⇒区長（チャマツト）⇒地区・町・村長（ルラ）⇒町内会長（パラ）



## 北スラウェシと BC 級戦犯

長崎 節夫

去った5月、鎌倉在住の脇田清之さん（本会賛助会員）を通じて、オーストラリア在住の柳井佐代子様からメールの連絡が入りました。要旨は以下のとおりです。

柳井さんの祖父・柳井稔氏は太平洋戦争以前からメナドを拠点に商社活動をされて、開戦と同時に海軍軍属として徴用され、日本軍占領中のメナドで一時はメナド市長を務めた。敗戦と同時に連合軍に拘留され、いわゆるメナド軍事法廷（オランダ管轄）で死刑判決を受けてメナドで銃殺刑に処せられた。その後遺骨は遺族の元にはもどっていない（どこにあるのかわからない）。柳井稔の孫である私はようやく子育ても終わって時間に余裕もできたので、今回、祖父の足跡を訪ねて歩いてみたい。

その後、柳井佐代子さんから柳井稔関連資料（おもに、戦前の二葉商会、戦中の南洋拓殖関連の資料）や、稔氏が内地のご家族にあてた手紙や写真などが脇田さん経由で送られてきました。また、脇田さん自身がネットで発掘した関連資料も追加されました。

さらに、メナド在住の本会会員中村さんが得意技を発揮して、メナドやその近郊の戦前の写真など、大変貴重な関連資料を何点かネットで見つけ出しました。

このように、準備万端とは言えないまでもある程度の予備知識ができたところに、柳井さんがご主人同伴でメナドにやってきました。

### 旧柳井家の発見と訪問

柳井さんと私たち（中村、長崎）が待ち合わせ初対面した場所は、メナド市役所前の広場の横手にある Ananas という名のパン屋（兼・軽食レストラン）でした。この敷地は昔の在メナド日本国領事館の跡です。すぐ横には柳井稔氏の住居がそのまま

の形で残っています。

80年前（蘭印時代）に祖父母が建て佐代子さんの父親もそこで生まれたという旧柳井家を見つけることが、今回の旅のメインテーマだということは聞いていました。しかし、当初はその場所がなかなか見つかりませんでした。

佐代子さんの祖母（稔の妻）が戦後30年ほど経ってから、昔の二葉商会の関係者と共にメナドを訪問したそうです。そのときに書かれた手記に「ティカラの家を訪ねた」という記述があって、家がティカラ地区にあったということはわかりました。しかし、最後の訪問からでもすでに40年経過しています。40年前と今ではティカラ地区も大きく様変わりしているはずですが、柳井家はまだ残っているというより、取り壊されて別の家が建っている確率のほうが大きいでしょう。

探す手がかりとしては、上記の祖母（柳井稔氏ご婦人）の手記のほかに、佐代子さんが祖父柳井稔について記した一文があって、その中に昔の写真がありました。室内（応接間）でのご家族や会社（二葉商会）関係者との記念写真、庭で家を背景にした写真など数枚ほどです。

私はほとんど諦めていましたが、中村さんはグーグルアースの映像で現在のティカラ地区の住宅をしらみつぶしに古い写真と照合したようです。ある日「柳井家が見つかった」と地図つきでメールが入りました。佐代子さんがメナドに入る直前のタイミングでした。現在のグーグルアースに写るある家と、古い記念写真の家の特徴（家の外形とか窓の配置、窓枠上部の空気抜き等）が一致している家があるとのことでした。

そういうことで、この旧柳井家らしい家の近くのパン屋兼軽食レストランを柳井さんとの最初の待ち合わせ場所としたわけです。パン屋さんで初対面の挨拶と軽い雑談のあと、柳井家と思われる家の前まで行きました。徒歩で1分もかかりません。道路から家の様子をうかがうと、空き家ではないようですが人の気配がしません。佐代子さんと中村夫人が庭に入って声をかけると、50歳くらいのミナハサ人らしいご婦人がでてきて、快く招き入れてくれました。

あらためて佐代子さん所持の古い写真と家の内部を照合してみると確かに同じ家です。

昨年（2016年）85歳で亡くなられた佐代子さんの父親がこの家で生まれたそ

うですから、建てられてから86年以上を経過している勘定ですが、内そと共に古い記念写真そのままです。こういうこともあるのかと、少し驚きました。われわれも古い記念写真と同じアングルで記念の写真を撮りました。

祖父・柳井稔が植えたという庭のマンゴの木も樹齢相応の大木になっています。家の内外が80年以上も前と変わらない状態で残されていることに少なからず感激しましたが、佐代子さんご本人の感慨はまたひとしおであったことでしょう。佐代子さんは戦後の生まれですからナマの祖父とは接していません。この場所に来るのも初めてです。しかし、彼女はこの家で祖父の体温をしっかりと感じたはずで

※グーグルストリートビューの画像と、当時の写真で、家の建造物の（縦方向の）比率をコンピュータで風漬しに比較・照合するという手法で発見に至りました。（中村）

※元柳井邸は、戦後、軍施設（官舎）となっており、幹部の自宅兼事務所として使われているようです。その関係で、写真などを公開することが出来ず残念ですが、一方で国の所有物となったため現在まで残っていたのであろうと思います。内部の作りも、本当に当時の写真と同じままです。しかし、当時の写真で壁にかかっている絵画など内装品は、数年前のマナド大洪水の時まで実際に写真と同じものが、あったそうですが、洪水で無くなってしまったという事です。あと数年前に訪れていれば・・・この点は、残念です。（中村）

## 処刑場跡

柳井稔氏を含むメナドの戦犯刑死者の処刑場がどこであるか、手元に届いたいくつかの資料では単に「広場で、ヤシの木にくくられて」と、つかみどころのないものばかりでした。

柳井氏の処刑（銃殺）は1947年、ちょうど70年前のできごとです。目撃者が生存していることも考えられません。私の身のまわりの高齢者で当時のことを知っているかも知れない人といえば、大岩富さんです。しかし、70年前といえば富さんはまだ日本に滞在中です。半分以上はあてにしないで処刑場の事を尋ねてみました。

富さんは太平洋戦争開始直前（10歳のとき）、日本を取り巻く情勢が陰悪になってきたのを心配した父親によって日本に帰されました。緊急避難です。そのころ、メナド在住の日本人の家族はほとんど帰国しています。富少年より少し先に、柳井稔氏のご家族（奥さんと子供、つまり佐代子さんの祖母と父親）も帰国しています。（\*このことは、佐代子さんから提供された稔氏の手紙資料でわかりました）

さて、日米開戦直前に日本に渡った富少年は敗戦後しばらくしてからメナドに戻りました。1952年、10年ぶりです。オランダとの独立戦争も一段落して世の中が少し落ち着いてきた時期です。

トミさんは日本軍のメナド占領中も、メナドで日本人が戦犯処刑されたときも日本に住んでいます。その彼がなぜ処刑場を知っていたかというところ。

当時、大岩家はトンダノ川がメナド湾にそそぐ河口の近くにありました（今でも一族が住んでいる）。メナドに戻ったばかりの富さんは、ある日思い立ってティカラ地区に住んでいた幼馴染を訪ねようと思いました。自転車でティカラ地区にさしかかると、歩いていた見知らぬおじさんに声をかけられました。おじさんはいきなり、「日本のトゥアンたちがここで銃殺された。髭のトゥアンもここでやられた」と、そばの原っぱを指さしたそうです。ヒゲのトゥアンというのはたぶん落下傘部隊の堀内大佐とのこと。

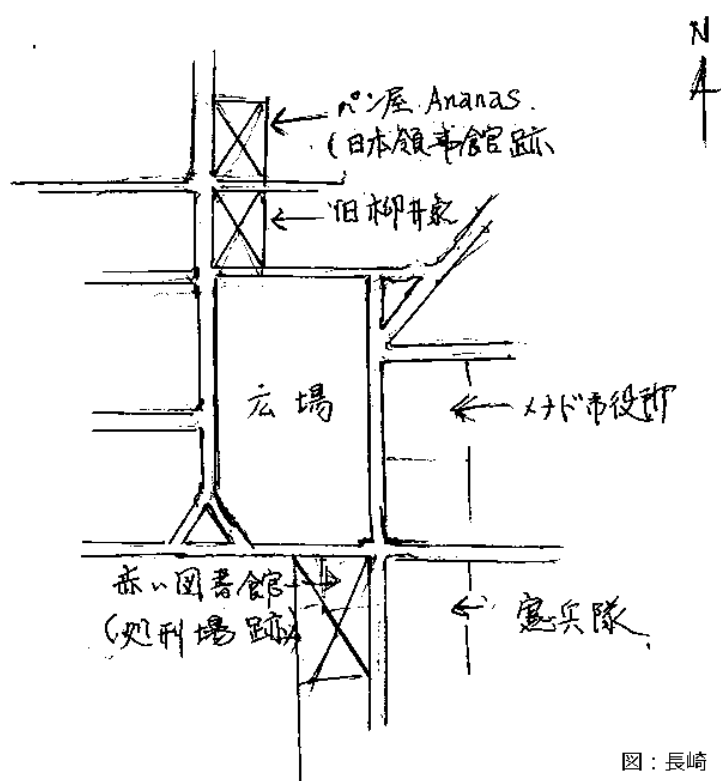
しかし、どこの誰とも知らないおじさんが何故、トミさんを見ていきなり、「日本人がここでやられた」といったのだろうか。わたしの疑問に対する富さんの答は「日本から帰ってきたばかりで、たぶん色もまだ白く、日本人にみえたのではないか」ということでした。戦前・戦中と、メナドにはかなりの日本人が住んでいたわけですから、そのおじさんも日本人を見慣れていて、富さんの姿かたちから日本人の匂いだけが雰囲気だかを感じ取ったと思われる。

富さんの不思議な体験が、70年後の今、貴重な証言となってとびだしたということになります。日本人戦犯の処刑場がどこにあったかと問う私に、「メナド市役所前の広場の横」と即答してくれました。翌日、さっそくその現場まで同行していただきました。（ビトゥンから車で2時間もかかります。富さんごめんなさい）。あの一帯は私もこれまでに何度も通っていますが、70年前の惨劇の跡であるとは夢にもおもいません。跡地には図書館、学校などいくつかの建物が建っていて、昔、原っぱであっ

たという姿は片鱗も見えません。その角地には図書館だという建物が建っています。そうとわかればあの建物の外壁の真っ赤な塗装は、処刑された方々の血の色であったかと納得できました。

あの赤い建物は、当事者（役所）はそれと知らずに建てたわけでしょうが、あれは日本人刑死者27名の慰霊碑であると思います。

会員の皆さん、そばを通りかかるときは一瞬でいいですから合掌しましょう。



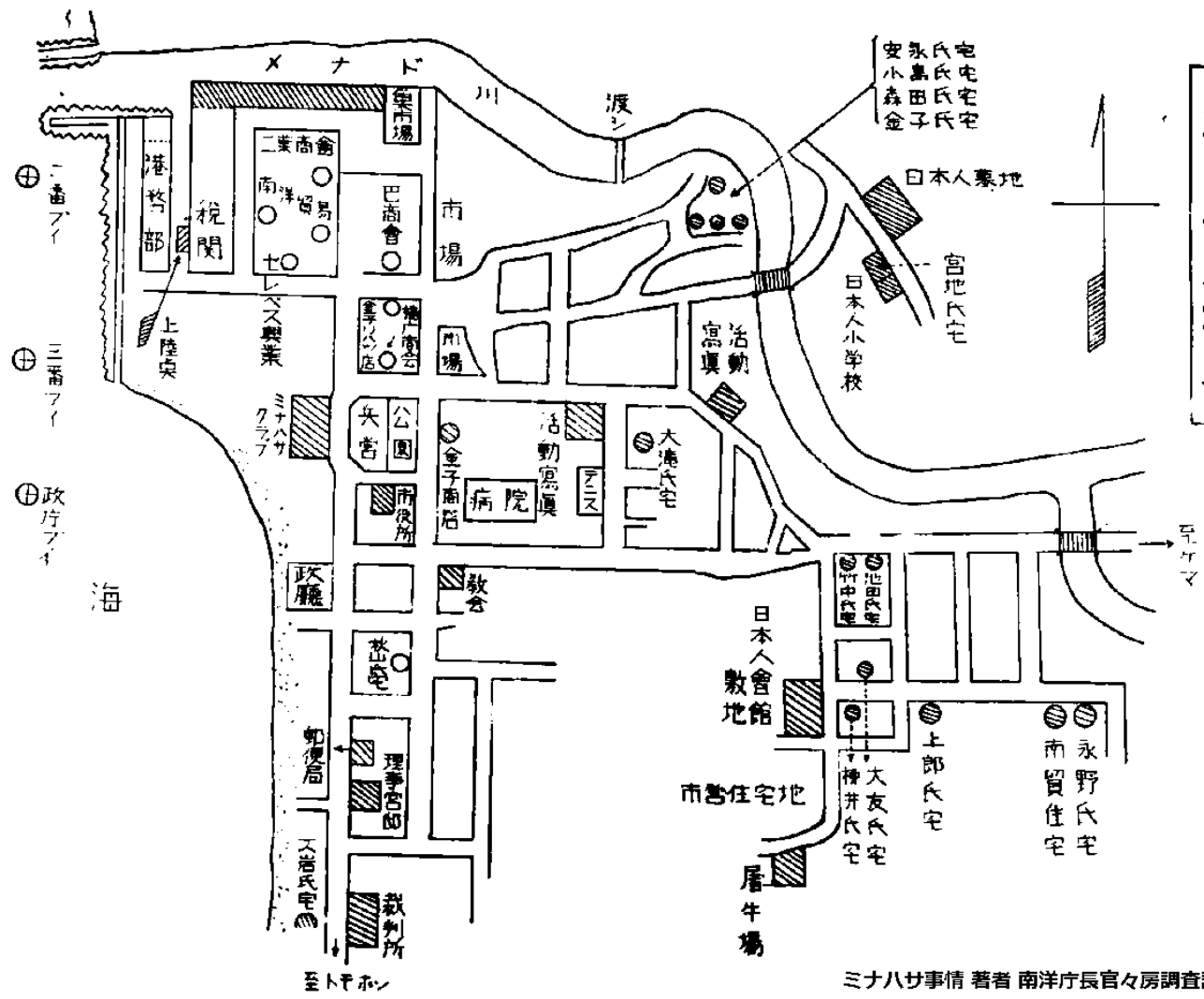
図：長崎

柳井家跡と処刑場跡の概略図

また、参考までに次ページに（まだオランダ統治中）昭和14年当時のメナド市内と日本人の住居を示した地図を「ミナハサ事情/南洋庁長官々房調査課編（1939年出版）」より引用しました。

この図書は、国会図書館にも所蔵されオンラインで閲覧可能（2017年8月現在）です。当時の日本人の活動やミナハサ地域（北スラウェシ）のことが良く書かれており、大変貴重な資料です。

メナド中心地略図



ミナハサ事情 著者 南洋庁長官々房調査課 編  
 出版社 南洋庁長官々房調査課 / 出版年 1939年

テーリン墓地 (遺骨の謎)

ティカラ地区の処刑現場からテーリン墓地にむかいました。刑死者の遺体は近くのテーリン墓地に葬られたといくつかの手記に見えます。処刑現場から車で10分、真昼の炎天下のテーリン墓地につきましたが、70年前に刑死者の遺体がこの墓地のどこに埋められたか、全く手がかりはありません。この日は、墓地内にある堀内大佐の墓の跡に手を合わせただけで引き揚げました。(後日、佐代子さん、中村さんと共に線香を持参して、この墓地のどこかに眠っているかも知れない刑死者氏の霊に線香とたばこ、ジュース、ヤシ酒を供えた)

「眠っているかも知れない」と書いたのは、処刑されたあとの遺体がここまで運ばれたことはほぼ間違いないのですが、そのあと遺骨がどうなったかわからないからです。しかし、遺骨が仮に日本に還っているとしても、この墓地の土は刑死者の血が染みているのですから、遺骨の在りかがわからない以上、柳井稔氏（ほか20数名の）お墓はここだ、と言っても間違っているとは言えないでしょう。

ある記録によると、日本人刑死者の遺骸はこの墓地に葬られたあと、遺骨はあとで掘り出されて墓地内に適当にばらまかれたとあります。もともとキリスト教徒の墓地であるテーリン墓地は埋葬式で、狭い用地がすぐいっぱいになります。無縁墓とみるとすぐに取り除かれて新しい墓をこしらえてしまいます。地元の住民でもない日本人戦犯刑死者が埋葬されていて管理者もいないわけですから、墓用地の欲しい人に真っ先に目をつけられても不思議ではありません。「遺骨がばらまかれた」ということは、十分にあり得ることです。

しかし、そのなかで堀内大佐の場合は事情が違っているようです。埋葬された遺骸（または遺骨）をばらまかれる前に、生前の大佐と面識のあったある地元民が大佐の墓をこしらえて遺骨を移した。（あるいは、面識はないが大佐の人徳を伝え聞いていた人物が、ということかも知れません。）その後、遺骨は無事に日本の遺族がもち還ったそうです

堀内大佐の墓の跡は今も残っていますが、管理する者もなく荒れ放題で、正面に新たに誰かの墓が造られ、正面玄関を塞がれた状態になっています。遺骨はすでに日本に還っているわけですからもはやお墓でもないといえばそれまでですが。

（\*本稿では気軽に「刑死者」と書いていますが、戦犯刑死は正式には「法務死」というそうです。戦に負けたために勝った相手から適当に犯罪人として指名され、弁護も思うようにできない適当な裁判で簡単に銃殺とか無期とか判決されるわけですから、「戦犯」とか「刑死」とか本来使用すべきではないと思います。しかし、「法務死」と言われても、いかにも六法全書的な言葉でわれわれ庶民の生活からかけ離れた感じがします。故にあえて、「刑死」と書いています。）

## 金子啓蔵氏の手記

手元に、ある手記のコピーがあります。

題名は「大崎大佐の思い出」、筆者は元興南組・金子啓蔵。経歴はよくわかりません。

(前略)

戦後18年たった昭和38年と39年の2回にわたって、私はマカッサルとメナドにある日本人戦犯処刑者の墓地探しに日本人としてはじめて単身乗り込んだ。

(中略)

大崎大佐が特別弁護されたメナド関係27柱は郊外テーリンのキリスト教徒の墓地内のブロックオランジャパン（\*日本人区画）に埋葬されていた。背丈ほどもあるラン草を刈りとらずと31柱の盛り土が見つかった。四柱は日本軍に協力して処刑された現地人であることも判明し、墓地中央に黒檀で墓碑をつくり、各墓ごとに番号をつけた墓標は後日の遺骨収集に備えたものであった。

(中略)

昭和40年1月、第3次訪イは厚生省遺骨収集団に参加、マカッサル、メナドの62柱の収容にあたった。

(後略)

これによると、メナド・テーリン墓地の27柱の遺骨は無事日本に還ったことになっています。しかし現時点で私が知っている限りでは、遺族のもとに還ったと言われているのは堀内大佐の1柱だけのようです。それも帰還のいきさつは金子氏の手記とは違うストーリーになっています。

現在、柳井稔氏の遺骨はどこにあるのかわかりません。ほかの25柱もどうなっているのでしょうか。

## 2. 刑死者の遺書



① 田畑盛順

鹿児島県屋久島出身。海軍軍属（元・大岩漁業）

昭和17年現地女性と結婚しビトゥン在住。男子二人あり。

昭和21年11月6日死刑求刑。11月25日判決死刑。昭和22年3月17日銃殺。

遺書

私は鹿児島県のとある沖縄近くの小さな島でうまれた。

12歳のとき、父母や兄弟、そして故郷と別れ、船乗りの修行に出た。

1925年（大正14年）9月17歳のとき沖縄人とともにミナハサ半島に  
わたり、戦争開始まであちこち航海してまわった。

船乗りの稼業のほかには何も知らなかったので、戦争になると私は徴用されて、  
やがて特警隊（特別警務隊）の通訳になった。

任務に従っている間、私は何らの特権を持っていたわけではなく、特警隊の  
通弁や、彼らの仕事を助けることをしただけである。

私はただ被使用人として彼らのために働き、彼らの命令を聞いたりした。

私ののは、これといって私にふさわしい仕事ではなく、ただ私は見たり聞いたり  
命令にしたがっただけなのです。

自分の意志に反しても命令に従わなくてはならなかった。

私は生来このような中で働いていくにはふさわしい人間ではありませんでした。

今、私はこの世を去ろうとしている。

この最後のときにあたって、私も、私のかつての行為のなかに例えどんな  
大きな過ちが犯されていたとしても、この世を去ろうとしている私のために  
許していただきたいと思う。

そして、罪なき一人の普通人として私を記憶していただきたい。

そうしてくれたら私は永遠の天国へ安らかに帰っていくことができるでしょう。

尊敬するあなた方に永遠の決別の言葉を捧げるとともに、深甚の感謝の意を  
表す。

神様、希くば私の願いと祈りを聞き入れたまえ。

わが魂を清めることによってそれに答えたまえ。

## ② 柳井 稔

昭和3年、南洋開拓の夢を抱いて夫人とともにメナドに入り二葉商会を設立。

昭和10年に二葉商会は国策会社である「南洋拓殖会社」と合併、

柳井はメナド支店長となる。

昭和17年の日本軍メナド進駐以降は海軍第8警備隊司令部付きとして

軍政に協力、昭和18年メナド市長を務める。

敗戦の1か月後昭和20年9月連合軍(豪軍)に捕らわれモロタイ島にて収容され、

昭和21年ふたたびメナドにもどされてオランダ軍軍事法廷にひきだされた。

昭和21年10月31日死刑求刑、同11月13日死刑判決、

翌、昭和22年3月17日銃殺。

前記の田畑盛順と同日の執行であった。

## 遺書

柳井千代殿

明後17日死刑を執行せらるる予定。これも運命なり。然し小生の一生を通じて南方進出を策し、国策また、国運を賭して南方作戦に従いついに敗れたり。

国家と運命をともにしてセレベスの土となる。小生のもって満足するところなり。

小生死後、子供の教育に任せられる貴女の御心労を深く謝すとともに、この父の分をも愛せられ、子供四人只々新日本有用の人物たらしめん事を切望す。

辞世

冬すぎて 春うららかや 死出の旅

散らばるとて 惜しくもあらぬ 姥桜

ただ 心にのこる 吾子のことども

## ③ 堀内豊秋

海軍大佐。開戦へき頭の昭和17年1月、落下傘部隊を率いてランゴワン飛行場に降下し、オランダの守備隊を駆逐した(当時中佐)。昭和20年の敗戦時には日本にいたが、連合軍により呼びだされ、メナドのオランダ軍事法廷に送られた。

軍事法廷の裁判長は堀内部隊によって駆除されたランゴワン守備隊の隊長であった。

## 遺書

9月23日、突然死刑執行の通知を受け、25日午前8時に執行されることとなった。

在世中は真に幸福な生活だった。

執行の日まで刑務所内でも多くのオランダ人の尊敬を受け、何ものかを残した。一誠よ、その他の子供達よ、父は国家の犠牲となって散るのだ。

櫻花よりも清く、少しの不安もない。

兄弟力を併せ、母親に孝養を尽くしてくれ。

人を頼ってはならない。あくまで清く正しい生活をなせ。

死に臨んで少しの不安もないのは、小生の過去の清らかな生活がさせるものと信ずる。

不幸な妻よ。子供よ。

父はなくとの決して自暴自棄することなかれ。

部下の散ったメナドで白菊の花の如く美しい態度で散るのだ。

年取った母上様。どうか先立つ因縁をお許してください。

兄上様、くれぐれも後に残された家族の行く末をお願い申し上げます。

千鶴殿、永い間お世話になった。

可寿殿、一生の内助、感謝しつつ逝く。

親戚の皆様ご機嫌よう。

人は自分を信じ努力すれば偉くなれる。

自分の死は見守る人もいないが

もう二人の日本人将校がのこっているが、これも遠からず執行されるだろう。

世に思い残すことは少しもありません。

堀内豊秋

堀内家ご一同様

二伸

これは通知を受けた日、オランダ将校に頼んで書いた。

オランダ将校も自分の態度にすっかり感心した様子だった。

故にこれを送ってくれるのだ。

この一事を以っても、自分が日本人将校として恥ずかしくなかったことを想像していただきたい。

神ぞ知る 罪なき罪に果つるとも 生き残るらむ大和魂  
白菊の香りを残し死出の旅 つわもの後われは追いたり

以上三通の遺書はいずれも戦犯刑死者の遺書を収録した「世紀の遺書」からの孫引きです。

田畑盛順はビトゥンの大岩漁業の漁師、柳井稔はメナドに会社を構えたビジネスマン、堀内豊秋は根っからの職業軍人。三者三様、それぞれの人生があったはずですが、運命のいたずらで同じ刑場の露と消えました。

3通の遺書から三者それぞれの心境が浮かび上がってきます。柳井氏は日本人としてお国のために頑張った、思い遺すことは何もない、と言いながらもやはり子供たちのことが気になります。堀内大佐も、日本の軍人として誠心誠意お国のために尽くした、あとは武士として立派に死ぬだけだと悟りきっています。

ちょっと変わった感じを受けるのは田畑盛順氏です。子供のころから漁師として育って、何となくミナハサ半島までやってきた。ビトゥンで妻子も得て、日曜日には教会に通うような平穏な生活を続けていた。急にオランダとの戦争がはじまって、日本軍がやってきて通訳として徴用され、わけもわからず慣れない仕事を頑張っているうちに、イクサに負けて銃殺ということになってしまった。何が何だかわけがわからない。こうなった以上、せめて天国にいけるように神様にお願いするしかない。というところでしょうか。

### **3 メナド戦犯裁判の特異性**

インドネシアにおいて戦犯裁判はメナドだけではなくマカッサル、バリックパパン、ジャカルタ、アンボンその他、おもは都市部で開かれました。もちろんインドネシアだけでなくフィリピン、シンガポールなど、およそ日本軍が足をかけた国ほとんどで

開廷されました。東京のA級戦犯裁判もその一つです。

もっともらしく「裁判」と称していても、「勝った者が負けた者を裁く」というのが真相ですから、裁く側には少なからず「報復」あるいは「懲らしめ」の意志がはたらいっています。戦犯裁判とは、私たちが常識として知っている裁判とは全く別の、戦勝祝いみたいなイベントだというのがホントの姿でしょう。

「勝った者が負けた者を裁く」と書きましたが、メナドの戦犯裁判はまたひとひねりひねくれて「負けた者が勝った者を裁く」という特異な形になっていました。北スラウェシで戦闘に勝ったのは日本軍で負けたのはオランダ軍です。初期のメナド攻略戦で負けたあと終戦まで、北スラウェシで地上での戦闘はなかったわけですから、オランダは負けたまま、駆逐されたままです。終戦（日本の敗戦まで）オランダ軍が北スラウェシに現れることはありませんでした。

勝ち戦の主演を演じたのが堀内豊秋中佐（当時）と彼の部下たちです。彼らは舞台登場も華々しく、なんと空から敵の待ち受けるランゴワン飛行場に舞い降りてきました。多大の犠牲をだしながらもなんとかオランダ軍を制圧しました。前記堀内大佐の辞世の句、「つわものあと我は追いたり」、というのは、この時の戦闘で戦死した副官ほか多くの部下のあとを私も追う、という意味です。

堀内部隊はオランダ守備隊を駆除したあと周辺集落の統治にかかるわけですが、はじめ、怖がって逃げ散っていた住民は、大佐の巧みなそして誠意ある誘導によって徐々にもどってきました。

それから3か月、堀内部隊は次期作戦でチモールに移動するのですが、この出発の日が舞台や映画でいえば涙のクライマックスです。ランゴワン周辺の住民がメナドの船着き場までトラックや徒歩で降りてきて（60キロもあるのです）住民自作の惜別の唄を合唱し、堀内部隊長と涙の別れとなりました。

このような、日本軍の主演というかヒーローというか、占領地の住民が泣いて別れを惜しんだという軍人を、負けて追い散らされたオランダの軍人が裁くといのは、子供でも茶番としか思わないでしょう。銃殺の判決ははじめから決まっているようなものです。

## 4 メナド戦犯裁判総括

開廷時期 1946年10月30日～1948年5月28日

裁判件数 ( )

判決 銃殺 27名(現地住民4名を除く)

無期 1名

有期 21名

合計 49名(軍人38名 民間人11名)

\*民間人11名のうち銃殺刑となった者8名)

## 5 結びに代えて

戦犯として裁判にかけられた日本人民間人11名のうち、ビトゥンに在った東インド水産(旧大岩漁業)の関係者が4人います。4人のうち、銃殺2名、無期1名、有期1名(20年)。いずれも海軍軍属として主に通訳の業務にあたっていました。

4人のなかに田畑盛順(銃殺)、出盛康儀(無期)という沖縄系の姓があります。

そして、ビトゥンの日本人墓地に、田畑並正 昭和14年8月28日歿 1歳、Y. IDEMORI 昭和14年没 1歳、という二つの墓碑があります。Y. IDEMORI が出盛康子であることは別の資料でわかっています。ふたりとも縁者はわかりません。

田畑盛順はビトゥンで妻帯、子供もいたことは裁判の記録にも残っています。出盛康儀と出盛康子、親子である確率が高いでしょう。

盛順は遺書からもわかるとおり12歳で故郷をはなれて南洋暮らしです。おそらく日本に縁者がいても彼の存在は忘れられています。もちろんお墓などないでしょう。康儀もほぼ似たような状況だと思います。ビトゥンまたは近郊に彼らの妻子、縁者がいないだろうか。この2柱の子供の墓はおそらく父親がこしらえたお墓です。田畑盛順氏も出盛康儀氏も、せめて日本人墓地で子供のそばに、あるいは一緒に休んでいたかどうかと考えています。

本稿の執筆中にこのこと(日本人墓地の子供の墓碑とメナド戦犯裁判の犠牲者との関連)に気づきました。

(完)

## 編集後記

もうすぐインドネシアは独立記念日をむかえます。町のメインストリートでは学童や先生方による行進が始まっていて、道路の混雑が目立ちます。北スラウェシ地方は雨期が終わりかけているのか降雨量が少なくなってきました。でも、まだ曇りがちの日が多く、完全に雨期明けとは言えない状態です。もう8月の中旬ですから今年は例年に比べて雨期が長いといえます。

8月といえば日本も15日の終戦記念日があります。実は、先月(7月)にメナドに縁のある日本のご婦人が(オーストラリア人の旦那さん同伴で)こちらにこられて、中村さんと私で少しお手伝いしました。

柳井佐代子さんの父親・柳井稔氏は、昭和3年に蘭印時代のメナドに入られ、二葉商会をたちあげて主にコプラの取引で会社を大きくしたようです。その後、国際情勢の変動とともに会社は「南洋拓殖(株)」という国策会社と合併し、柳井氏はメナド支店長となります。時間的な順序はよくわかりませんが、メナド日本人会会長やメナド市長(昭和18年)などを務め、昭和20年の敗戦で抑留され、2年後には戦犯として銃殺されてしまいます。

柳井氏のほかにも、先の戦争にからんでメナドには日本人の悲しいドラマがいっぱいあったわけですが、うかつにも他人事扱いで触らずにきてしまいました。

今回の柳井佐代子さんとの接触で目を覚まされた思いです。罪滅ぼしということではありませんが、今号でメナドBC級戦犯裁判を題材にして駄文をつづってみました。もっと資料を収集して、もう少しまともなレポートに仕上げたいと思います。

今泉会長は南洋真珠シリーズ第5作です。なにしろ南下(南進)してすでに20年以上経過しています。隠していることがもっともつとありそうです。

中村さんのひょうたん島のなできごと、直美さんのバリの生活レポート、大貫さんのちょっと休憩のレポート、すべてほんとに味のあるレポートでした。ありがとうございます。

古賀さんから、辛島さんのレポートが欲しいというリクエストがありました。辛島さんと何とか連絡をつけて一筆書いてもらいましょう。ついでに古賀さんにもお願いします。

(長崎)

# 会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014年04月20日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- 会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。
- 各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。